

樹齢200年の時を超えて表れる 水墨画のような黒い模様「黒柿」 伝統の技を受け継ぎ、現代風にアレンジ

黒柿は、樹齢200年ほど経つと、不思議な黒い模様が表れることがあります。300年を超えると、葡萄模様や孔雀模様のようなさらに希少な模様が表れる場合も。どれ一つとして同じ模様はなく、気の遠くなるような歳月と自然だけがなせる神秘。

人々がその優美な木目に魅了され、道具づくりに用いたのは遙か太古の時代にまで遡ります。流れるような黒い模様に人々は何を想い、手にしていたのでしょうか。

古代より続く崇敬 高貴な存在だった「黒柿」

正倉院には、黒柿で作られた厨子や供物台などが残っています。飛鳥・奈良時代から仏前に供える道具づ



道具箱



くり抜き茶櫃



囲炉裏テーブル



作家 岡 英司 氏

株式会社おかや 代表取締役
社団法人 島根県物産協会理事
社団法人 クラフトデザイン協会会員

1980年 1952年創業のおかや材木店5代目を継承、創作活動始める。
1985年 クラフトショップ工芸おかや設立、ギャラリー併設。
1986年 日本クラフト展 初入選

1992年 日本工芸展(熊本)
1995年 山陰暮らしの工芸展 奨励賞、斐川町卓越工芸品表彰
2004年 天皇陛下へ黒柿拭漆硯箱、献上の栄を賜る
2010年 皇太子殿下の島根県ご来訪の折、献上の栄を賜る
企画展・個展等、多数開催。

水墨画のような黒い模様が表れる黒柿は、樹齢200年ほど経つたもので、模様があるかどうかは切ってみて初めてわかるという希少さ。磨くほどに輝きを増し、絹のように滑らかな木肌は、職人たちはもちろん、当代の貴人たちを魅了してきました。

出雲で伝承された黒柿工芸 優美な模様に魅せられて

松江藩の藩主・松平治郷公は、茶道を極め、茶道具の材料として黒柿を好んだと伝えられています。また出雲地方は、茶道具だけでなく、黒柿を使った



平卓花台と天然花入れ



選び抜いた国産木材を用いて職人が一つひとつ丁寧に仕上げます

土木建築や木彫を手掛ける職人も輩出し、近世においても豪農屋敷、商家、料亭などでも細部にわたって黒柿を使用したものが数多く残されています。

岡さんと黒柿の出会い、松平家の菩提寺である月照寺でのこと。独特の黒い模様の箱を見たときでした。見る人を強く引きつける、唯一無二の圧倒的な存在感は、岡さんの人生を変えるかけがえのない瞬間となりました。

その後も、正倉院の作品、熊本城の文机、道後温泉の欄間の透かし、加賀藩家老の邸宅の欄干など、様々な黒柿と出会い、さらに感銘は深まってきました。希少なため戦後は特に材料確保が難しく、高価であるが故、買い手も減少していた黒柿工芸品。岡さんに「何とかこれを継承できないか」という熱い想いが込み上げ、お茶道具の復刻に取り組んだのが現在に至るきっかけとなりました。



御朱印帳

花瓶つぼみ

伝統美を受け継ぎながら 新たな時代のものづくりを

伝統的な黒柿工芸も、「現代の暮らしに馴染んだ、新しい形を作り出していくことは、大切なことだと思っています」と岡さん。

たとえば、厨子は、現代の住宅事情を考慮して仏壇の役目を果たせるように工夫し、壁掛けや花瓶などお客さまのご要望にお応えした暮らしに身近な作品を製作してみたり。「御朱印帳」の表紙と裏表紙、角の丸まった文鎮など、岡さんの娘さんたちのアイデアを形にしたものも生まれました。



過去の匠夢フェスタ会場

岡さんは「仏教や茶道という精神的な世界に用いられてきた黒柿の工芸品は、現代社会においても、それぞれの使われ方の中で、その世界を感じてもらおう深い時間にお役に立てたらと思っています」と話し、「今の時代に求められる形を知り、挑戦することは新たな目標にもなり、楽しみでもある」と微笑みます。

匠夢フェスタでは、リピーターの皆さまのご期待に応えたいと、毎年、新しい作品を出展しています。今年はどうな形のものに挑戦したのか、どんな斬新な黒柿工芸品が出来ているのか。是非、手にとってご覧ください。



黒柿